資料2

大学教育の日本的特徴と「評価」

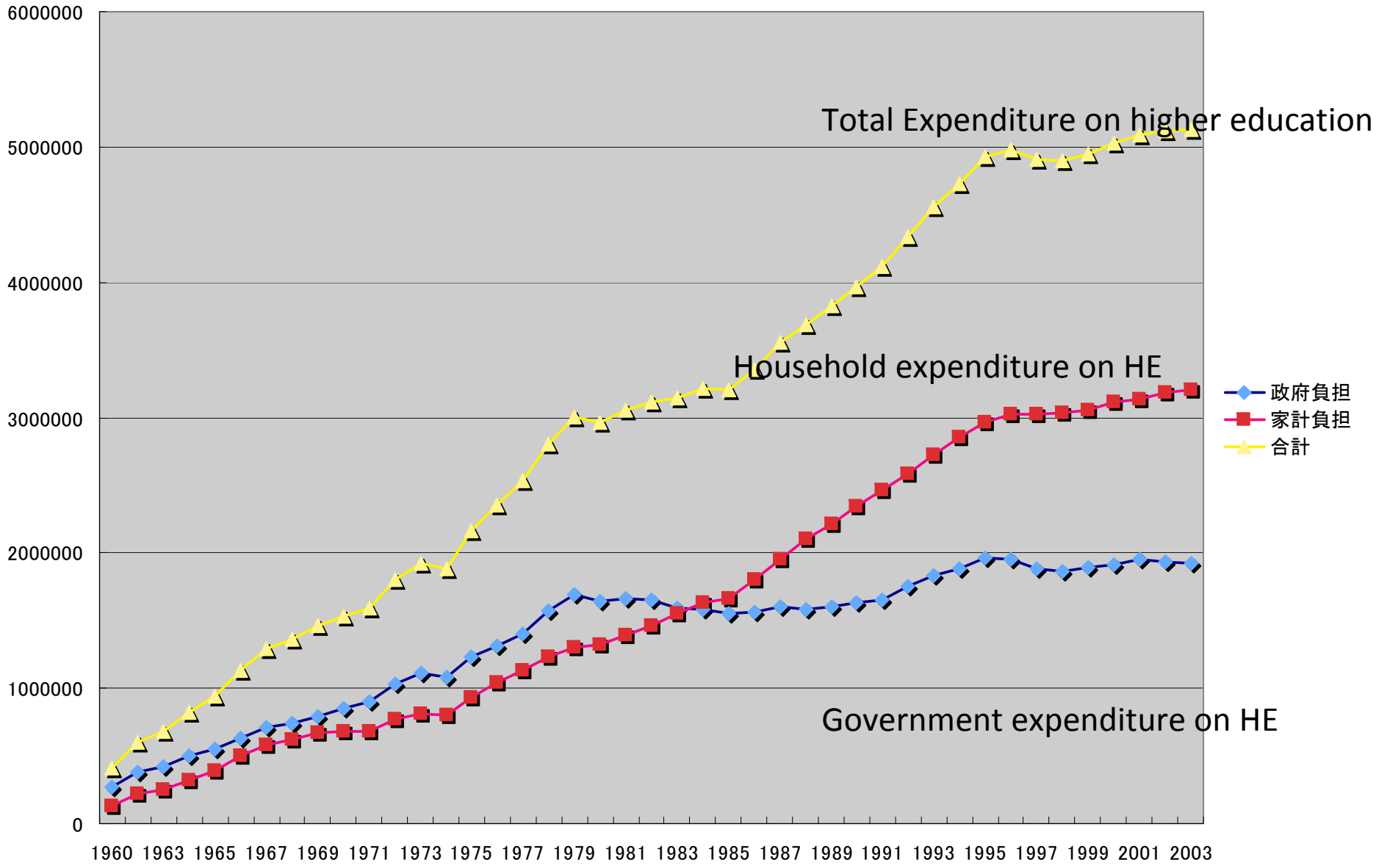
苅谷剛彦
東京大学大学院教育学研究科

構成

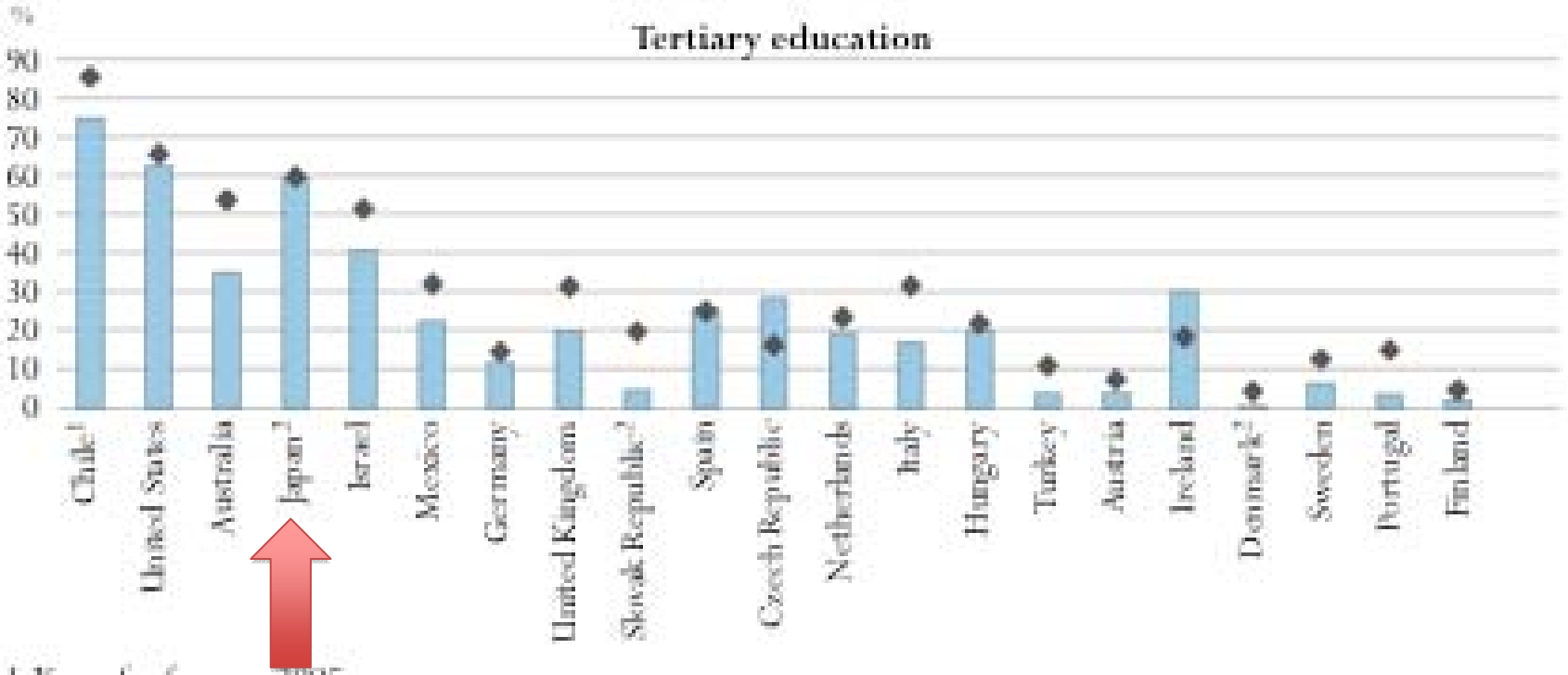
- 大学教育の日本的特徴として以下の3点を上げる
  - privatizationと階層性
  - カリキュラムの構造と時間割
  - 教員と行政組織

これらをふまえて、質保障と評価の問題を考える

高等教育費の推移（2000年価格：単位　百万円）



高等教育費における「私的」支出の割合

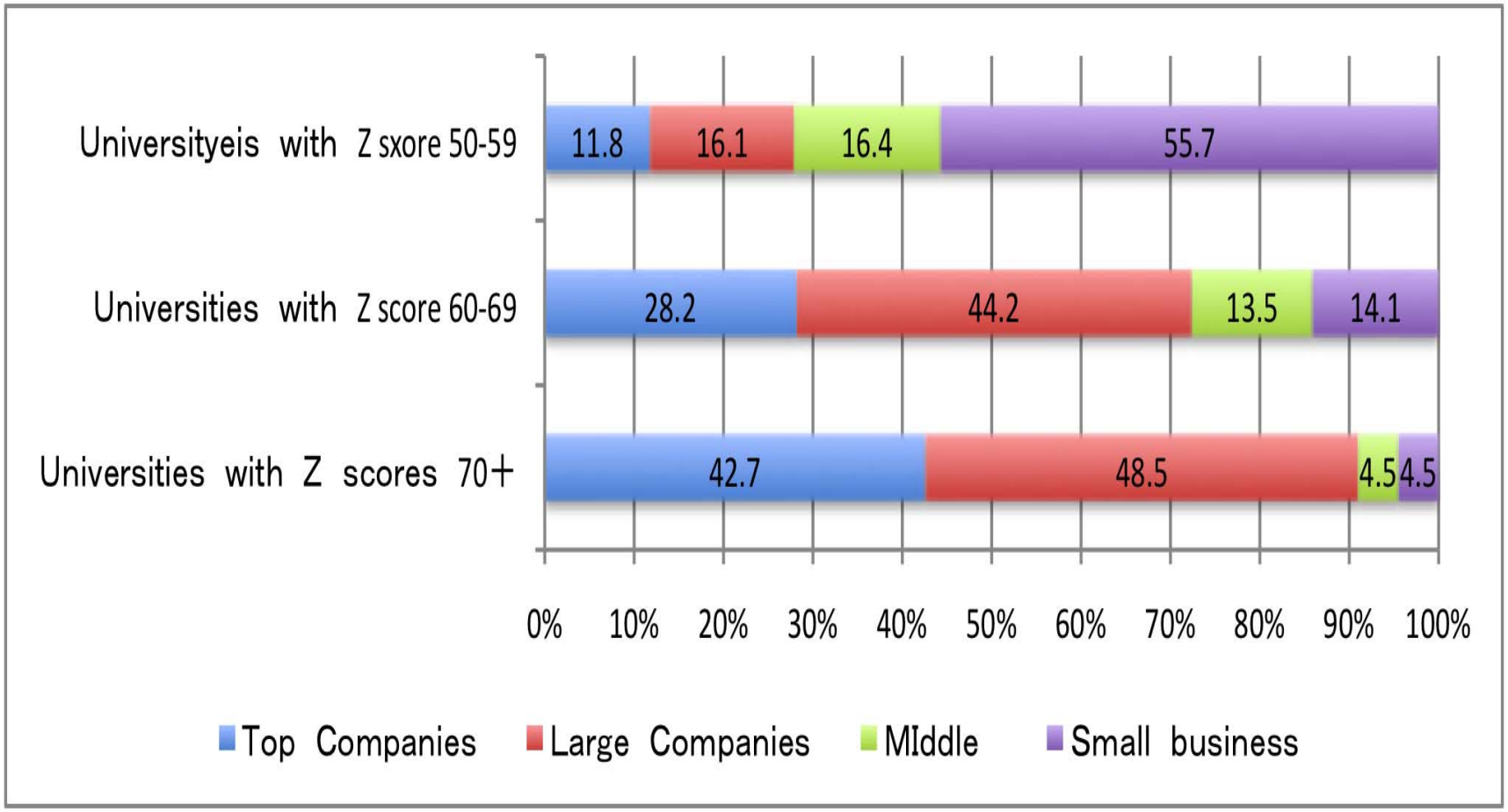


1. Year of reference 2005.
2. Some levels of education are included with others. Refer to "x" code in Table B1.1b for details.

Countries are ranked in descending order of the share of private expenditure on educational institutions in 2004 for all levels of education.

Source: OECD Tables B3.1, B3.2a and B3.2b. See Annex 3 for notes (*www.oecd.org/edu/eag2007*).

大学の入学者偏差値と
卒業生の就職先企業規模との関係



平沢（1995）

大学(文系)におけるカリキュラム

- 週１回一コマを中心とした時間割
- 講義中心：東大生の場合(2005年調査）：

  授業　4時間50分（授業コマ数換算3.2コマ）

  自宅・図書館での学習　1時間51分/日

これでは、単位制度が前提としている講義時間以外の学習をほとんどしていない

シラバスの日本的特徴：講義の内容紹介；リーディングアサインメントはほとんどない

日本的特徴の意味

- アメリカなど：シラバスによる授業内容の把握は、リーディングアサインメントの内容によって可能→教育内容の標準化の意味
- どうして日本ではそうならないのか？
- 週１回の授業を単位とした時間割と授業分担のしくみ
- 大学教育の軽視(実質３年制大学）
- それでも困らなかった：市場を通じた評価

大学経営組織の専門性(質)と量

- 「大学＝教授会の自治」原則：多様な仕事；
  教育、研究、行政、入試、リクルート

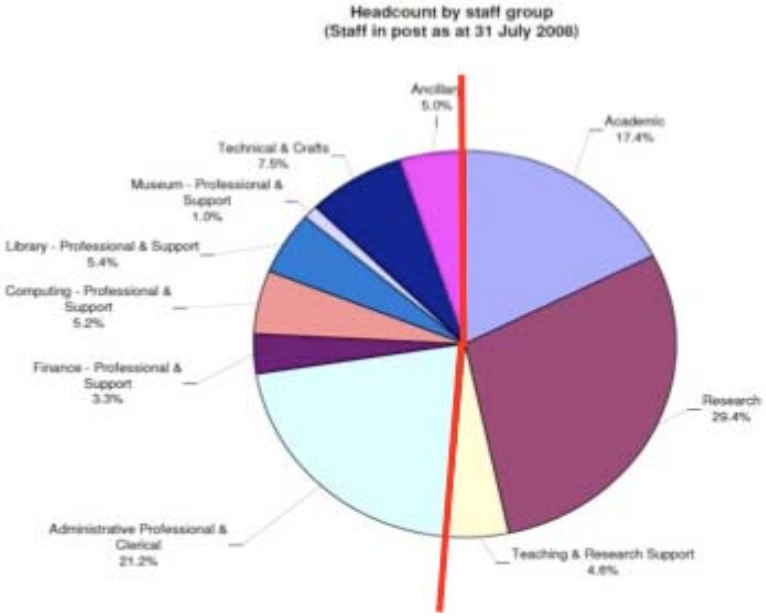
大学経営の専門家と組織の弱さ

質と量：サポート体制の差異

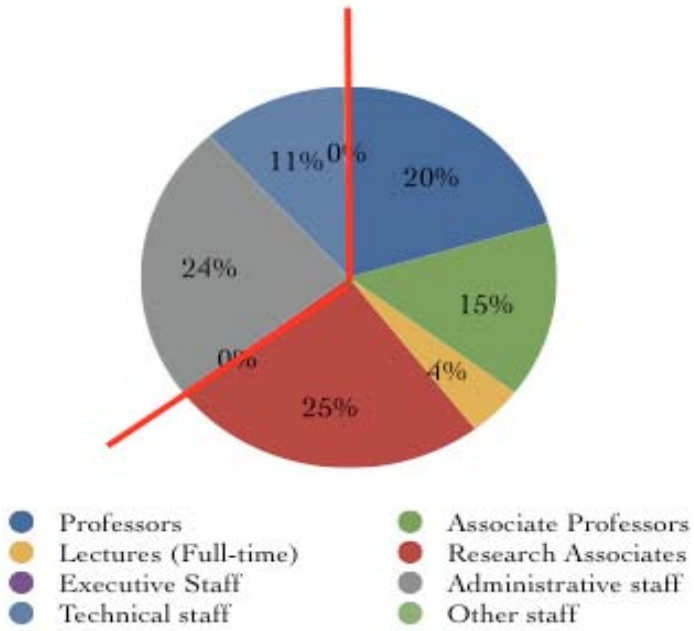
教職員の比率(筒井泉氏作成のスライドより)

教職員の割合（病院職員を除く）

University of Oxford



University of Tokyo



評価に対応するコストとベネフィット

- 評価の準備を誰がするのか？
- 評価のコストを誰が負担するのか？
- 評価の結果を誰が利用するのか？

- リスクとしての学・協会のinterestsと「大学の自治(見識)」との葛藤

誰のための評価か

- アカウンタビリティが問われるほど公的支出が多いわけではない
- 家計や企業からの評価にはさらされてきた(教育の内容や結果でなく)
- 学生にとってプラスとなる評価とは？
- 大学人にとってプラスとなる評価とは？
- 改善のためのループはつながっているのか？→ここにもコスト問題